

---

[成果情報名] 省力栽培できる単為結果性ナス「省太」

[要約] ナスの促成栽培における省力的生産を図るため、単為結果性ナス系統「省太」を育成した。本系統は、栽培期間を通じて着果促進処理が省略できる。また、慣行品種と比較して、総収量は同等である上に厳寒期における果実のボリュームが優れる。

[キーワード] ナス、単為結果性、促成栽培

[担当部署] 野菜部・施設野菜チーム、筑後分場・野菜チーム

[連絡先] 092-922-4364

[対象作目] 野菜

[専門項目] 育種

[成果分類] 新技術

---

[背景・ねらい]

本県におけるナスは野菜第2位の生産額を誇る重要な品目である。そのほとんどは促成栽培であり、着果促進処理に多大な労力を要している。一方、厳寒期の果実が細いことも課題の一つとなっている。

そこで、着果促進処理が省略でき、厳寒期に果実のボリュームが優れる単為結果性ナス品種を育成する。

[成果の内容・特徴]

「省太」は、平成16年に「筑陽」および「黒陽」（いずれも（株）タキイ種苗）を種子親とし、単為結果性ナス系統「AE-P03」および「AE-P08」（いずれも農研機構野菜茶研育成）を花粉親としたF<sub>1</sub>の蒴培養により育成した固定系統同士を交配して得られた系統である。その育成経過および特徴は次のとおりである。

1. 単為結果性を有する固定系統「福岡なす母本1号」と「福岡なす母本2号」をそれぞれ種子親と花粉親として交配した雑種第一代（F<sub>1</sub>）である（表1）。
2. 促成栽培期間を通して安定した単為結果性を発現することから、着果促進処理を省力化できる（表2）。
3. 着果促進処理を行った「筑陽」と比較して果実の首径および最大径ともに大きいことから、厳寒期の果実ボリュームに優れる（図1、表3）。
4. 「筑陽」と比較して、総収量は同等である（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本県と農研機構野菜茶業研究所の共同育成品種として、平成24年6月19日に品種登録出願公表。

[具体的データ]

表1 育成経過

年次	試験内容	品種・系統の組合せ
H16年	交配	「筑陽」×「AE-P03」 「黒陽」×「AE-P08」
H17年	蒔培養	↓ ↓
H18年	系統選抜 組合せ能力検定	「福岡なす母本1号」×「福岡なす母本2号」 ↓
H19年	生検予備	「07F <sub>1</sub> -20」
H20年	生産力検定(場内)	「省太」
H21~22年	生産力検定(場内、現地)	

注) 「AE-P03」、「AE-P08」は農研機構野菜茶研育成の単為結果性ナス系統

表2 着果率および収量性(平成21年)

品種・ 系統名	着果促進 処理	開花数 個/m <sup>2</sup>	着果率 %	収穫果数 果/m <sup>2</sup>	総収量 kg/m <sup>2</sup>	商品果率 %
省太	なし	126.6 *	95.7 ns	121.0 *	17.1 ns	83.5 ns
筑陽	あり	136.5	94.9	131.0	17.1	84.8

- 注) 1. 定植: 9月11日、台木: 「トナシム」、21年10月~22年5月収穫  
 2. 着果促進処理: 4-CPA剤(トマトーン60倍液)による単花処理  
 3. \*は5%水準で有意差あり、nsは有意差なし(t検定)

表3 厳寒期の果実形状(平成22年)

品種・ 系統名	果実重 g	首径 cm	最大径 cm	果実肥大日数 日
省太	127.7 *	3.15 *	4.25 **	30.1 ns
筑陽	118.3	3.00	3.98	29.8

- 注) 1. 22年12月~23年3月に、果実長20~22cmを目安に収穫した果実の平均値  
 2. 果実肥大日数: 開花から収穫までに要した日数  
 3. \*\*, \*はそれぞれ1%、5%水準で有意差あり。nsは有意差なし(t検定)



図1 厳寒期の果実(2月7日)  
 左: 「筑陽」、右: 「省太」

[その他]

研究課題名: ナス新品種の育成

予算区分: 県特(おいしく、健康によい新品種開発事業)、経常

研究期間: 平成22年度(平成16~22年度)

研究担当者: 古賀 武、下村克己、末吉孝行、森山友幸